



身忘新角力式

遠呂
925
2



八五八
1925
2

年忘漸角力を二

△回文箋

大梁

隠居生^{えま}もを^まおろし^ちおけつて^ておろし^しま^まを^をおろし^して^ておろし^しま^まを^をおろし^して^て
 おろし^して^ておろし^しま^まを^をおろし^して^ておろし^しま^まを^をおろし^して^て
 おろし^して^ておろし^しま^まを^をおろし^して^ておろし^しま^まを^をおろし^して^て
 おろし^して^ておろし^しま^まを^をおろし^して^ておろし^しま^まを^をおろし^して^て
 おろし^して^ておろし^しま^まを^をおろし^して^ておろし^しま^まを^をおろし^して^て
 おろし^して^ておろし^しま^まを^をおろし^して^ておろし^しま^まを^をおろし^して^て



は道のせむに二又とありなれば源氏あるのうちに
よしくとありあづきね大原さるるまのうら
とてあつちせんは四又せよきうあげなれば源
氏あるを見て思案してりしもあづあ

○ 苗字 遠の 任十

よーとよのこころあふかひよむらし男あきら家
文はくしそまかきあひもくろひのこころとせ
みたりは一さきよ侍るかこちうるがたよあひと心
おしけるあまといふれほど驚りたりあかぬきさる

よつけて思あひぬきとあり侍るよおのあひたりと男
よはるよあひはさくらとくしとくしむくはさうりし
世をあひくぞ思ひたるよのいふれありよもあひこれ
をよおのりる目もひんあきて女のたうちあひははを
かたり何とあひいとぬえりせ侍りつく男あまあひあ
たり月もみちあある日あつちとあつちとあつちとあ
あひあひたりなれば女くししみあつちのむだあひあひ
かの女をひあもよよああ後よりあつちてあつちを
くしと力付たりあつちあつちのくしあ余りよ中あ

くといへば何のけし中で文七を呉るおたりと何る

△ 粹 自傍

丁林

そらの息子めがらうふまゝなるれと敷友のむひも
てつへまへといふふあまじや今うらげを細う
してけし流がまじやのよと変てあんどやあらの
むさこめがらうそらやあまじや久しうあつたあ
ぬまよのそしやけしるのあはれが敷友をみるのよそ
あしやあいらるうあつたや

○ 敷上人の執心

菅水

アハ 敷上人はとうあつた英人おれさせぬひてより
くまをけきまのせられ病の床はあしやけしる
典業まじり療治よ心をばさるくとせむ平あ
一人の老医けんをぬじて敷中の病根もれたら敷
る英人の別業あつたあれいむきよけしる法をむせ
れあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあ
といふ一作せられあつたあつたあつたあつたあつたあ
よあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあ
画工の若人志屋敷がけられたあつたあつたあつたあ

はるををあびて陽氣をうきむる如く花びらくは
又人あてしをまをみまねたかいらぬはあはれを
まのありとちりし食るものなりしはかみしるを
あはれそのる人出役者をきりしものほをや一
はあはれしよあはれしもの信也むを強と使や
あはれしものあはれしものはよはしむるは
衆を日よはれとまよはれしものあはれしもの
あはれしものあはれしものあはれしものあはれしもの
あはれしものあはれしものあはれしものあはれしもの

後めけあてはえをちやくあのみよるよまのよ
あはれしものあはれしものあはれしものあはれしもの
あはれしものあはれしものあはれしものあはれしもの
あはれしものあはれしものあはれしものあはれしもの
あはれしものあはれしものあはれしものあはれしもの
あはれしものあはれしものあはれしものあはれしもの
あはれしものあはれしものあはれしものあはれしもの
あはれしものあはれしものあはれしものあはれしもの

△ けこの林鹿

ウニ

あはれしものあはれしものあはれしものあはれしもの



角三郎の世をのぞくかへりて
 ある家居をのぞくかへりて
 どのやうに肉をたぎらば床のるよ
 そのあはれなとほくちやあふ
 是れをわいせつ人のほ世を
 續けまよはれあへりて
 くだらぬものなるかへりて
 是れをわいせつ人のほ世を
 ひろくちあへりて

角三郎の世をのぞくかへりて

角三郎の世をのぞくかへりて

上人のうまよをえむかきむのひとらてりやうよ給まをあふ
よそりばしとやの言かその人法ごとあうよと今の世そん
かよのばいふの能くまのよしゆでよびるよふいふたのり
ぬごんをそりく遠の毛ひまをうとよまりのの遠かといふ
とはあつてよふあふくふの九五日

○ 本栗の喜 昇 武

さる禪僧かく一書をとりて極ちく子をもけきん
の業よあ育をたの世をはづりかるるがる日彼の子
をつれてあまの寺のそらよひをばらしてあをわるをの

僧あれをん付てまよりても人目あまの河原のほまふ
叔もよふさやのふといふれが喉を撃てて

△ さいの川系 布生

せらりまこの人死にけるがびやうくと産の川系
とあふよはいとや迷途う何とを極果びいりものとあ
取青鬼と悪鬼があまのまの何ものや人私
あはれあでせらり何といはれ科あるゆいといは
はとあふぞ極果まのりまふとらまふとら二鬼あはれ
あはれあてあ房も持てい入るのるまああああ人

しまとて喰ひあつたれど女のおちをさうお女のむね
くくさむもあつたの川原うせう人ましくおの在りて
入むとよきなり女房の味もえんておのますとよハ 鬼何
トや女のおぢをまのてするウツ人おねをさうとよハ 鬼小
あつたそそのおぢはどのよまあものトヤ

○ 時 行 止 の

松隣庵

毎夜又とやものハ強ひおてまてまふかナまふかどくとお
らぬらハイあつたびおてまてまふかどく原平のうのる天晴の
切名とびくおつたひふかうおつたどやラ先ツせあつたせつ

なることよりあつたハイまハおれも横年よことしののりりの母さん
まのてあつたサアそつたなるがはまてまふかどくまふかどく
ハイまつたはしておつたおつたおつたおつたおつたおつた
てあつたはしておつたおつたおつたおつたおつたおつた
おのの袖女のおも宝のまおまびはけを喰ひあつたお
トヤテラッレナラあつたおつたおつたおつたおつたおつた
後よ換よあけこのハテハテハテハテハテハテハテハテハテハ

△ 蕨の影を馳る 馬耳風

を以田いんたをよりののりなる名画エありしうそ徳大とくだいよ

きよ久禁^{きん}休^{きゆう}より馬をぬびとのほろ^{ほろ}久^{きう}よ^よい^い西^{せい}を^を
筆^{しつ}を^をあ^あの^のさ^さを^をぬ^ぬは^はじ^じう^うち^ちの^のけ^けを^をよ^よけ^けの^の院^{いん}は^は眼^{がん}
を^をか^かひ^ひん^んこ^こと^とけ^けを^をと^とけ^けし^しま^まさ^さを^をぬ^ぬは^はす^すい^いと^とあ^あひ^ひ
張^{はり}を^をち^ちの^のは^はほ^ほて^てな^なま^まい^いぬ^ぬと^と流^{なが}き^き流^{なが}き^きぬ^ぬを^をぬ^ぬは^はす^すい^い
凡^{ぼん}十^{じゅう}つ^つま^まう^うち^ちの^のけ^けけ^けが^があ^あま^まり^りの^のけ^けけ^けせ^せか^か
あ^あく^くま^まり^り画^が師^しも^もよ^よく^く短^{たん}竹^{ちく}して^てを^をぬ^ぬは^はす^すい^いた^たが^が
一^{いち}所^{しょ}ふ^ふび^びを^をと^とて^てま^まや^やつ^つよ^よく^くま^まる^るま^まに^にま^まか^かつ^つて^ての^のい^い

○ 長老のお志

大梁

長老

おぼるるにくも信もは上京のより

信房 だげで

おぼりまた^ま長老^{ちやうらう} 何^{なに}ぞめ^めつ^つし^しに^にあ^あら^らの^のい^いつ^つか^か ^ままの^の
おめ^めつ^つし^しに^にあ^あら^らの^のい^いつ^つか^か ^ままの^のい^いつ^つか^か ^ままの^のい^いつ^つか^か ^ままの^の
十^{じゅう}つ^つま^まう^うち^ちの^のけ^けけ^けせ^せか^か ^ままの^のい^いつ^つか^か ^ままの^のい^いつ^つか^か ^ままの^の
あ^あの^のま^まめ^めつ^つし^しに^にあ^あら^らの^のい^いつ^つか^か ^ままの^のい^いつ^つか^か ^ままの^のい^いつ^つか^か ^ままの^の
と^とあ^あら^らの^のい^いつ^つか^か ^ままの^のい^いつ^つか^か ^ままの^のい^いつ^つか^か ^ままの^のい^いつ^つか^か ^ままの^の
て^ては^はじ^じた^たが^がと^とん^んと^との^のい^いつ^つか^か ^ままの^のい^いつ^つか^か ^ままの^のい^いつ^つか^か ^ままの^の
怪^{あやし}しの^のら^らが^がち^ちの^のい^いつ^つか^か ^ままの^のい^いつ^つか^か ^ままの^のい^いつ^つか^か ^ままの^の
の^のよう^{よう}あ^あら^らの^のい^いつ^つか^か ^ままの^のい^いつ^つか^か ^ままの^のい^いつ^つか^か ^ままの^の
ア、何^{なに}とや^やあ^あら^らの^のい^いつ^つか^か

源氏物語 卷第二

二の巻終

